

# 智猛並に法勇の求法行記について

—附、法盛の歴國傳—

諏訪義讓

## 一 序 言

智猛法勇の二人は晋末宋初の項、求法氣運が勃興した時、入竺求法した代表的な支那僧侶である。求法者は必ずしも行記があるに限つてゐないが、若しあるとすれば其の業績も明かとなり又後世學界を裨益するところ甚だ大であらう。而して行傳の有無さえ確かでないのが多いのに、この智猛と法勇には明かに行傳があつた。その上、如何なる程度のものであつたか推測するに足る資料がある。たゞ本文が現存しないのが遺憾の極みであらう。

併し乍ら茲に是れを問題にするのは強ち新しい發見をしたと言うのではない。實はこの方面の研究に可成り推進力となり權威的な發言を残された小野玄妙博士によつて

聊か誤り傳へられてゐる點があると考えからに他ならぬ。この際、正しくは如何に見做すべきかを敢えて提唱してみたいと想うのである。

## 二 僧傳と行記

この二人の傳記は出三藏記集第十五卷及び梁高僧傳第三卷に見えてゐる。それ等によつて大様を述べてみる事とする。

先づ智猛は雍州京兆郡の人で後秦の弘始六年(404A.D.)同志十五人と語らつて長安を出で西域諸國を経て葱嶺を越え波耨國<sup>①</sup>に入つた。同行の中、九人は葱嶺より歸國し又、竺道嵩なるものは病歿してしまつた。が進んで雪山を通り罽賓國に達し更に中印度の佛跡を訪ね華氏城では泥洹經と摩訶僧祇律を得た。そして元嘉元年(424)歸

國の途に就き同志四人を失つて曇纂と僅か二人で涼州に着した。その後、元嘉十四年蜀の地に移り同十六年(439)七月遊歴した行傳を著わし元嘉の末年に示寂した。

次に法勇は梵名を曇無竭<sup>③</sup>(Dharma-vikrama)と言ひ幽州黄龍の出であつた。その頃、印度から歸つた法顯寶雲等の談話を聞いて心動かし劉宋の永初元年(420)僧猛曇朗等二十五人と契りを結び高昌龜茲沙勒を経て葱嶺並に雪山に及んだ。この山中に於て同志十二人を失ひ次いで罽賓國から中印度に至る間にまた八人を亡くした。それより諸方の聖地を巡り南印に出で乗船して海上より廣州に歸り來つた。揚州に達したのが元嘉の末年(453)で別に記傳を残したと傳う。

以上の記載で知るべき要點は

智猛、波崙國を通り入竺。陸路歸國。行傳あり。

法勇、波崙國を経たか否か不明、海路歸朝。行傳あり。

と言う事であらう。波崙國は Bolor の音譯であり玄奘の西域記第三卷には鉢露羅國と見え現今の Balistan 地方を指すものと認めてよい。<sup>④</sup>是れは求法に當つて如何なる通路を採つたかを推察するのに重要なキイである。行傳の名稱は未だ是れだけでは明かでないが存在した事は認むべきである。

併し同じ出三藏記集でも第八卷に出てゐる『二十卷泥洹經記』の下には『出智猛遊外國傳』と見え、智猛の行傳が『遊外國傳』と稱せられた事を確め得る。是れは隋書の經籍志や道宣の釋迦方志、續いて唐書の藝文志などに『遊行外國傳一卷』と現わるゝもので、特に後者の名稱が正しく、尠くとも唐代に残存してゐたと定むべきであらう。

また法勇の行傳は歷代三寶記第十卷に『曇無竭外國傳五卷竭自述西域事』と傳えられ、隋志に『外國傳五卷釋曇景撰』と載せらるゝものに相違ない。曇景は曇勇の誤りであらう。通典邊防典(一九一卷)の條に『曇勇外國傳』と稱してゐるのに依つても主張出來ると思う。それ故に法勇の行記は『外國傳五卷』なるものであつて唐代に現存してゐた。

#### 註

① 出三藏記集は『波淪國』梁高僧傳は『波倫國』とする。林屋博士は國譯一切經の註に『波刺斯 Persia』に充ち。誤りであつて『波崙』又は『波論』でなければならぬ。

② 小野博士は『恐らく印度に入り僧になつてから付けられたもので、譯して法勇と言ふ。姓は李氏、其の本名を詳にしない』と推定さる(後掲ビタカ)。吾々は入竺求法僧なるが故に好んで梵名を用いた結果に過ぎぬと眺めたい。

③ 索橋、棧道を通つた由。同じく波崙越えであつた公算が多い。

④ 大谷大學研究年報第一輯。拙稿『勃律の位置』参照。

⑤ 隋書經籍志には又『京師寺塔記二卷釋曇景撰』と稱するものがある。同じく曇勇の著作として考慮に入れるべきであらう。

### 三 小野博士の發表

扱てこの二人の求法行傳に關して小野博士は昭和十一年の雜誌ピタカの五月號から三回に亙つて『晋末宋初の入竺僧猛と曇無竭の行記に就いて』と題して研究を公表された。その中に博士は『智猛法師の外國傳四卷曇無竭法師の歷國傳四卷は隋末唐初までは世に現行してゐたらしいがその後は全く其の傳を失つてしまつた』と述べ次いで『この二法師の入竺行記の一端を揣摩するに足る資糧を設令片鱗とは言ひながら之を同好諸賢に報告するの光榮を有するものである』と前書きし『それは他ではないが夫の梁の寶唱等の編纂と思はるゝ翻梵語と言ふ書物の中に前記二法師の入竺行記の中から若干數の單語が摘出してあつてそれに由つてこの二法師の遊履した地點の幾箇處かを指示する事が出来ることである。是れは些細なことやうではあるが實は仲容易ならぬ貴重な文獻

と考へられる』と昂揚された。<sup>①</sup>

勿論、茲に示された『翻梵語』<sup>②</sup>なる書物が梁のの莊嚴寺寶唱の編纂にかゝるものか飛鳥寺信行の手になるものか議論はあるであらう。併し兎も角、寶唱の撰述と明記されたものはないにしても一應その項の成立と見做して差支えない。その翻梵語の中に見える外國傳（四卷まで）の單語九部六十五語と歷國傳（四卷まで）の單語十六部五十九語を取出して譯釋を加え其れて依つて兩者の行歷の大様を推定されたのである。如何にもこの博士の外國傳並に歷國傳の發見と其の行程の跡附けとは非常なる學界への貢獻である。

だが、その結論に見えるやうに『外國傳を智猛のものとし……第四卷は南印度から錫蘭に渡り更らに西印度まで各地を遊歴した』<sup>③</sup>と認め『歷國傳を曇無竭のものとし……第四卷は錫蘭に渡つて海路を経て廣州に歸還した』<sup>④</sup>と定めて、それでよいのであらうか。

尠くとも前述の第二節に於て吾々が究明した結果とは相容れない事となつてゐる。即ち智猛に『遊行外國傳一卷』があり、曇無竭には『外國傳五卷』あつたのとは全く異なる様相を呈してゐるであらう。

博士は是れに對して次の如く洩してゐる。

『私は最初外國傳と言ふ書名を歷代三寶記の記文からして曇無竭の著作として覚えてゐた。それが先入主となつて翻梵語の歷國外國の兩傳の著者を定める時、何とはなしに輕卒に外國傳を曇無竭、歷國傳を智猛のものとした。直ぐ後になつて智猛の行記に依つて書かれた出三藏記集の記事を思ひ起し實はそれとは全く反對に實際は外國傳が智猛の著作であり、歷國傳が曇無竭の述記である事を知つたのである』と。<sup>⑥</sup>

蓋し博士は初め歷代三寶記に『曇無竭外國傳五卷云々』と稱してゐるのを重視して翻梵語の外國傳を曇無竭のものと認め、他の歷國傳を智猛のものかと推察し、後に至つて出三藏記集第八卷の經記に『出智猛遊外國傳』と記されてゐるのを知つて翻梵語の外國傳こそ智猛の遊外國傳なりと考え直し他の歷國傳をやむなく曇無竭に當てざるを得なくなつた事であらう。

併し、是れでは行傳の名稱が重ぜられてゐない。その上、何よりも卷數に注意が拂はれてゐない憾みがある。<sup>⑦</sup>

或はもつと根本的に言うならば視野が狭くて史料の範圍が佛教關係以外に及んでゐないと評し得るのであらう。

若し隋志通典唐志などの書誌に眼を轉じてゐるとすれば(假令、歷代三寶記釋迦方志などを取出さなくとも)『智猛

遊行外國傳一卷』『曇無竭外國傳五卷』と定まつて來て早計な誤りを冒さなくても濟んだ事と思う。當然、翻梵語の『外國傳(四卷まで出づ)』は法勇のもの』とし『歷國傳(四卷まで見ゆ)』は他に求め『行かねばならぬ順序となる。

#### 註

- ① 五月號 (p. 35-6)
- ② 大正藏經第五十四卷 No. 2130. 大谷大學藏本・五冊・餘大 No. 1051.
- ③ 南條本に賢賀の信行説出で、高橋本に實靈の寶唱説がある。『佛典研究』二二(昭和六年十二月號)參見。
- ④ ピタカ七月號 p. 22. B.
- ⑤ ピタカ十月號 p. 41. A.
- ⑥ ピタカ十月號 p. 33. B.
- ⑦ この混同や輕視は小野博士のみでなく林屋博士も同様である。出三藏記集第十五卷智猛傳の國譯の註に『歷國傳。今逸失して傳らず。智猛遊外國傳の一部は本集卷第八の最後に出づ』と稱せらる。

#### 四 歷國傳の比定

然らば歷國傳を如何に取扱うか。是れを推測するには二様の方法があらう。一は書誌學的に隋志唐志等に所在を求めてゆくこと二は求法行傳であるから求法者の列名

してある釋迦方志<sup>①</sup>や佛祖統紀<sup>②</sup>等に當つて行傳を探してゆく事である。だが後者には直ちに書名が出てゐると限らない。寧ろ前者の方法に據るのが賢明であらう。而して隋志を繙くに果して智猛法勇の求法行記に續いて『歷國傳二卷釋法盛撰』と名付くるものが見え、舊唐書經籍志新唐書藝文志にも亦同様に出てゐる。

この法盛は如何なる人物かと訪れば高僧傳第二卷の曇無讖傳に僅か『時高昌有沙門法盛。亦經往外國。立傳凡有四卷』と附け加えらるゝもので、釋迦方志下卷にも『釋法盛亦經往佛國。著傳四卷』とあるのに間違ない。ところがこの法盛は幸にして寶唱の『名僧傳』の抄本に残存してゐて稍々精しく傳つてゐる。必要な部分を引用してみよう。

法盛本姓李。壘西之人寓于高昌。九歲出家勤精讀誦……年造十九遇沙門智猛從外國還。述諸神迹因有志焉。

辭二親率師友與二十九人。遠詣天竺經歷諸國。尋覓遺靈及諸應瑞。禮拜供養以用三業。憂長國東北見牛頭栴檀彌勤像。身高八尋云々。

是れは行記に何等觸れてゐないが、法盛の出自や求法の動機や憂長國の通過等の事實を窺ひ得て誠に貴重な資料である。殊に高昌に早くより寄寓し高昌の人と考へら

るゝに至つた實情を知るべきである。

か様にしてこの法盛に歷國傳なる行傳があつた事を認め得たのであるが、卷數の相違を如何に了解するか問題である。是れを要約すれば佛教系は四卷と傳え外典系は二卷と見ゆる。併し外典系は隋志が二卷と稱したのをそのまゝ唐志等に承け繼いだもので、何づれかと言えは佛教系の記載の方が責任を持つてゐる様に推察する。既に高僧傳に四卷と明記するから信用したのであるが、更らに方面を異にして『日本國現在書目』にも『歷國(傳)四(卷)釋法盛撰』と出でゝ注目に價する。否それよりも是れを決定的ならしむるものは他ならぬ禪梵語引用の歷國傳そのもので『四卷までの單語が現れ而もその單語が求法の終末を物語つてゐる』<sup>③</sup>から歷國傳の四卷完結を斷定せしむるであらう。

試みに掲げるならば歷國傳の第四卷に出づる單語として楞迦州 Lankāvatara (Ceylon) 阿婆耆梨寺 Abhayagiri (Ceylon) 波私國 Pāṣeī (Sumatra) 等の名稱があつて、是等は錫蘭又は南海の記述を推察せしめ『唯に求法や行傳の終末を告げる』のみならず『歸路南海に從つた』事を新しく暗示するものである。

因みに法盛は往路何づれの道を探つたのであらうか。

充分明瞭でないが、同じく翻梵語引用の單語に伽沙國 (Chitral or Gilgit) 波盧國 (Balistan) 等が歷國傳の第一卷にあると傳える。是等の單語の存在は『葱嶺から南下して Gilgit を通り Balistan に向つた』事を證明してゐる。

是れは又翻梵語の單語にこそ見えないが名僧傳には憂長國 Udyāna (Swat- Valley) を經て行つたと言う事實と想い合はして、近時京都大學が學術探検隊を派遣してゐる Karakoram-Swat 方面の調査地域に相當し、甚だ興味深く覺えるのである。

従つて小野博士の比定された法勇の歷國傳四卷こそ實は法盛の歷國傳四卷であつて、今や新しい脚光を浴びて再びその語彙とその究明とを徹底的に爲さねばならぬ事となつて來た。是れ小野博士の所謂智猛の外國傳が法勇の外國傳五卷である事の誤りを正すに止まらず、茲に兩者を殊更らに論じ上げて歷國傳の法盛説を附した所以であつた (三三・一一・一九)。

## 註

- ① 下卷遊履篇第五
- ② 第五十三卷歷代會要、西天求法。
- ③ 名僧傳の目錄に據れば第二十六卷尋法出經苦節六の下に『宋黃龍、法勇八』として出てゐた由。今は逸失す。名僧

傳抄は大日本續藏經乙第七套第一冊にあり。

④ 續群書類從八八三。日本に流傳された卷數とすれば一層頼母しく且懐しさも感ずる。

⑤ 以下特別記號の示す部分は法盛傳の性格を新しく決論附けるものである。

⑥ 尙ほ法盛の撰として『菩薩投身飼餓虎起塔因緣經一卷』が傳へられてゐる事を記しておく。大正藏第三卷 No. 172.